

プラットフォームが家事労働と社会関係に及ぼす影響

研究代表者

藤田結子

東京大学大学院情報学環准教授

1 はじめに

本研究は、情報技術がもたらす労働の変容、とくにAI技術の発展とプラットフォームを介した家事代行サービスの広まりに注目し、探究するものである。欧米先進国では、共働き世帯の増加に伴い、これらの技術を利用することで女性が家事や介護から解放されるという楽観的な見方がある。その一方で、これらの労働がいっそう不可視化され、機械に代替されるべき価値の低い労働とみなされるようになるという議論も提起されている。また、これらの家事代行を行うギグワーカーが直面する構造的問題が指摘されている。

欧米と比較して、性別分業がより根強い現代日本において、家事に関わるプラットフォームの広まりは、家事労働とその社会関係にどのような影響を与えるのだろうか。本研究はこの問いを出発点に、欧米で発展してきた関連理論を援用し、日本の文脈を考察することを目的とする。以上のことから、本研究は主に次の2点に焦点をあてる。(1) 家庭において女性たちはどのようにテクノロジーを利用して家事労働を行っているのか。(2) 家事代行プラットフォームではどのようにギグワーカーの家事労働が価値付けられ、取引されているのか。考察のために、本研究では先行研究のレビューと、プラットフォームの質的分析を実施する。これらの作業を通して、情報技術発展の影響による家事労働の変容と内実を明らかにすることで、家事労働とテクノロジーをめぐる理論の発展と、少子高齢化社会の課題解決に貢献することを目指す。

2 先行研究レビュー

2-1 家庭における女性のテクノロジー利用と家事労働

家事労働とテクノロジーに関する先行研究は、主に欧米で行われてきた。既存研究においては、AI搭載のスマートホーム技術や家庭用電化製品が女性の家事・ケア責任に与える影響について、評価は様ではなく、多様な知見が提示されている。一部の研究では、これらの技術が家事労働に要する時間および身体的負担の軽減に寄与する可能性がある」と強調されているが、他方では、新たな負担の発生や既存の不平等の再強化を指摘する見解もある。さらに、複数の研究者は、デジタル技術が伝統的な労働形態に代替されることにより、家事労働の性質そのものに質的变化が生じている可能性を指摘している。

複数の研究において、スマート家電やロボットが労働集約的な家事を自動化し、女性の総合的な負担を軽減する可能性がある」とされている。たとえば、働く女性が特に時間節約型の技術を積極的に導入し、生産性の向上やワークライフバランスの実現を図ろうとする傾向にあることを示している。AIによって繰り返しの作業が自動化されることで、貴重な時間が確保され、身体的疲労も軽減されると考えられる。また、テクノロジーへの関心が高い家庭においては、男性がこれらの機器の設定や保守を担当することもあり、そのことが間接的に女性の家事負担の軽減につながる可能性も指摘されている (Aagaard & Madsen, 2022)。

しかしながら、上記のような利点が認められる一方で、スマートホームシステムの導入が女性に対し新たな責任を課し、また既存のジェンダー規範を強化する可能性についても複数の研究が警鐘を鳴らしている。Strengers & Nicholls (2018) は、「デジタル家事 (digital housekeeping)」という概念を提起し、機器の更新、トラブルシューティング、データ管理といった新たな作業が女性の総労働時間を増加させる可能性を示している。技術的作業を男性が担う場合もあるが、根本的な日常的家事労働は引き続き女性に偏って配分される傾向がある。この傾向は Hobbs (2021) も指摘しており、高性能調理家電の導入が調理労働のジェンダー分担構造に何ら変化をもたらさなかったことを明らかにしている。さらに、Martin (2022) は、スマートエネルギー技術が、男性に家庭内のエネルギー管理権を与える一方で、女性が日常の家事を担い続ける構造を温存しうることを警告している。

また、近年の研究では、家事労働が主に身体的な作業から、認知的・管理的業務へと変化している点にも注目が集まっている。スマートデバイスの導入によって身体的な負担が軽減される一方で、それらの機器には常時の監視やトラブル対応が求められることが多い。このような質的变化は、家族内で労働が再配分され

る場合には肯定的に評価されうるが、多くの場合には従来の負担が別の形で置き換えられるに過ぎない。

総じて先行研究は、AI を搭載した家庭用技術が、反復的な身体労働の自動化によって一定程度、女性の家事負担を軽減しうることを示している。しかし同時に、これらの技術は新たなタスクを生み出す可能性や、既存のジェンダー不平等を維持・強化するリスクも孕んでいる。特に、男性がデジタル作業を主に担い、女性が日常的な雑務を引き続き負担するという構図が維持される場合には、実質的な変化は限定的である。さらに別の文脈では、身体的負担の軽減と引き換えに、女性の労働は認知的・管理的側面において増加するという「質的な転換」も観察される。このように、女性の総合的な負担が減少するのか、変わらないのか、それとも形を変えて再構成されるのかは、家庭内の力関係、文化的規範、個別の価値観や実践との複雑な相互作用によって左右される。

2-2 日本における家事労働とテクノロジーの影響

日本国内における先行研究を見てみると、AI 搭載家電に特化した研究は依然として限定的であるものの、既存の IoT (Internet of Robotic Things)、ケアロボット、コミュニケーションロボットに関する研究 (Moon et al., 2020; Shiomi & Hagita, 2017 など) から、少なくとも以下の点が示唆される。

まず、家庭の状況や導入方法 (例えば、媒介者の有無や費用負担の仕組み) によっては、女性の家事・ケア労働は部分的に軽減されうる。ただし、技術が高度になるほど、設定・管理・保守といった関連作業が増えるため、必ずしも総労働時間が減少するとは限らない。Shiomi & Hagita (2017) は、ユーザー評価が低い場合、追加的な対応を求められる人物 (多くの場合、女性) がその補助業務を担うことになり、結果的に負担が増加する可能性を指摘している。

また、ロボットや AI が一部の身体的作業を代替したとしても、機器の管理、設定、トラブル対応といった「認知的負担」が増大する可能性がある。家事やケア業務全体の効率が向上しても、Moon et al. (2020)、Takahara et al. (2020) などの研究が示すように、家庭内における性別役割の固定化が根強く残るため、責任の性質が変わるだけで、負担そのものがなくなるわけではない。加えて、高額な導入コストや、世代間におけるデジタルリテラシーの格差も普及の障壁となっており、家庭ごとの状況によって大きな差異が生じている。

上述の論点は、AI や IoT に限定されず、高機能ではあるが AI 非搭載の家庭用電化製品、とくに炊飯器に関する研究とも共鳴する。福田 (2009) によれば、高齢者にとって複雑な操作系統が使用を困難にしていることが明らかにされている。具体的には、「かんたんメニュー」や「ヘルシーメニュー」など抽象的で曖昧なラベルが混乱を招いているという。また、「▲」「▼」といった記号も、機種によって意味が異なるため、誤操作やストレスの要因となっている (福田 2009)。多機能でボタンの多いインターフェースよりも、簡潔で直感的な設計が好まれる傾向が強い。結果として、高機能な炊飯器を高齢者が単独で操作することが困難である場合、家族、とりわけ女性にケア負担が加わることになる。日本の家庭においてはケア労働を女性が担う傾向が強いため、高齢の親を持つ女性が機器の操作、修理の手配、またはより使いやすい機種の探索といった対応を引き受ける可能性が高い。つまり、「利便性」を追求して設計されたはずの電化製品が、皮肉にも女性の家事・介護負担を増やす結果をもたらす危険性がある。この点は、技術開発の方向性そのものに対する重要な示唆を与えている。すなわち、利便性と効率性を追求する技術設計が、家庭内のジェンダー不平等構造を見直すことなく進められる場合、結果として女性にさらなる負荷を課す可能性がある。

このような日本における女性とテクノロジーの関わりについて、働く母親の状況を見てみると、都市部を中心に、働く女性の階層化が進み、大企業で働く女性と、低賃金のパートタイムで働く女性に分かれてきている。この状況の中で、食器洗浄機、洗濯乾燥機、ロボット掃除機といった家事支援機器や、家事代行プラットフォームの普及は、掃除・洗濯・食器洗いなどの作業に必要な時間と労力を削減してきた。2001 年から 2021 年にかけて、6 歳未満の子どもを持つ共働き家庭における妻の家事関連時間を見ると、1 日の平均家事時間は 3.53 時間から 2.58 時間へと、長期的に緩やかに減少している。女性の家事時間が減少した要因としては、技術の普及と進歩、ミールキットや配達サービスの充実、そして若年層においては依然として限定的ではあるものの、夫婦間での家事分担傾向の緩やかな進展があげられる。これらの傾向は、男性の家事参加時間が増加傾向にあるという統計的データにも裏づけられている。

一方で、育児時間は 2001 年の 3.03 時間から 2021 年には 3.54 時間へと増加している。女性の育児時間が増加している背景には徹底育児とも訳される intensive mothering (Hays 1996) の社会的圧力があると考えられる。この概念は、育児には多大な労力と注意を要するという価値観に基づいており、Hays (1996) はその

特徴を、①子ども中心性、②専門家の助言の重視、③感情的関与、④労働集約性、⑤経済的負担の5つに分類している。とくに、中流層出身で高学歴な母親は、家事時間の削減によって生じた余暇を主に育児に充てる傾向がある。これらのデータは、一見すると女性の「家事負担の軽減」として肯定的に映るが、同時に「育児負担の増加」という新たな課題も浮かび上がる。

さらに家事のうち負担の大きい食事の用意に焦点をあてると、「手作り料理の規範」が根強く維持されていることが繰り返し指摘されている（江原，1988 他）。この規範は、「女性が手間と愛情を込めて一から料理をすることで、家族の絆が深まる」という信念に基づいており、西洋における集中的育児のモデル以上に、家庭料理の手作り性と労働集約性を理想とする傾向が顕著である。藤田・額賀（2022）の調査では、ある女性は、システムエンジニアとして働く夫が毎日 23 時以降に帰宅するため、平日の家事と育児の大半を一人で担っていた。彼女は「手作り＝愛情」という考え方に否定的な立場を取るが、夫婦の収入に余裕があることから、5 万円程度の高性能調理家電を複数購入していた。しかし、高度な AI 搭載家電は高価であり、すべての家庭が購入できるわけではなかった。世帯所得が高い参加者は機器によって家事の効率化を図っていたが、比較的低所得の家庭では、家電を購入するのではなく、比較的安価で手軽な加工食品などを利用することで時間の節約を試みていた。また、大学卒でない母親ほど、「手作り料理＝愛情」という価値観をより肯定的に受け入れていた。このように、フルタイムで働き十分な収入のある女性は、生産性向上やワークライフバランスの必要性から、時短技術を積極的に導入する傾向がみられる。一方で、パートタイムで働く女性は、経済的制約や伝統的なジェンダー役割に影響されていた。いずれのパターンにおいても、調理時間が一部の母親において短縮されたとしても、調理労働の性別分業構造自体は変わっておらず、子どもに食事を用意する責任は母親が担い続けているという点で共通している（藤田・額賀，2021）。

このようにテクノロジーを用いても、女性の家事負担の削減にさまざまな障壁が立ちはだかることが明らかになっている。次に、このような家事労働をスマート家電ではなく、他の女性に代替してもらうことで解決を試みるプラットフォーム経済とギグワーカーの労働について検討する。

2-3 プラットフォームと女性の労働

AI 技術が発展する今日、プラットフォーム経済の急速な成長が、仕事の性質にもたらす帰結が議論されるようになった。その 1 つの論点として、雇用の不安定性があげられる。プラットフォームは雇用に対する責任を外部化する一方で、集中的な権力を行使してきたと指摘されている。配車サービスなどの単発の仕事を請け負う「ギグワーカー」には若年男性が多いが、家事や買物、育児を請け負うギグワーカーの大半は女性であり、今後も増加が見込まれている。このような家事代行は主に低収入、有色人種の女性によって行われている。一方で、利用者は高収入の白人（あるいはマジョリティ）である。欧米では、このような家事代行は、ワーカーと利用者の接触をなくす方向に進んでいる。利用者は職場にいる間にスマホで作業を発注し、帰宅すれば掃除や洗濯が済んでおり、家事を行ったワーカーを目にすることはない。機械によって自動で家事がなされた感覚を抱くようにサービスが設計されている。このようなサービスの普及によって、これまで女性が行ってきた家事や家族の世話が、機械に代替されるべき価値の低い仕事とみなされ、様々な問題が生じる可能性が指摘されている（Atanasoski & Vola, 2019）。

その一方で、欧米ではプラットフォーム労働が「柔軟で自律的」「低参入障壁」な働き方として称賛される傾向がある。だが、実際には女性にとって仕事と家事・育児の責任を両立させるための「自己責任型」労働となっているという批判も存在している（Dubal, 2020; Fleming, 2017）。柔軟性は雇用者側の責任回避の手段であり、労働の不安定性（不規則な収入・保障の欠如）を女性に転嫁していると指摘されている。また、Shestakofsky（2017）、Kellogg et al.（2020）らは、アルゴリズムによる労働管理が労働者にとって不可視で、予測不可能な評価・解雇を引き起こすと指摘する。この構造は、女性やマイノリティなど社会的に脆弱な立場の労働者を、理由なく排除する仕組みとして機能している。労働条件が一方的に変更されることも多く、労働者には交渉力がほとんどない。

このような女性ギグワーカーが直面する障壁については、Doshi（2024）のインド・ムンバイのプラットフォームと女性ギグワーカーに関する研究がその構造を明らかにしている。第 1 に、多くの女性にとって、働く前にまず「家族の許可を得ること」が最大の課題となる。特に夫や義家族が女性の就労に否定的な場合、長期にわたる交渉が必要となる。企業側もこの問題を把握しており、採用面接に家族同伴を求めたり、家族を説得する研修担当者が存在する場合もある。第 2 に、プラットフォーム労働には、研修費・キット代などに計 5～6 万円以上の初期投資が必要とされる。多くの女性はローンを組んで参加するが、費用を払っても採

用が保証されているわけではなく、研修後に不採用となるリスクもある。第3に、長時間の研修と、並行して行わなければならない家事・育児の両立は、精神的・身体的に大きな負荷となる。育児中の母親にとっては特に難易度が高く、挫折する要因となりうる。第4に、就労後も、評価システムやAIによる管理によって、一定基準を下回ると突然アカウントが停止される。評価基準の変更や不透明な判断によって、本人に自覚のないまま解雇されることが多く、再就労の道も狭い。第5に、再登録しようとする、身分証明書の再提出やアプリの不具合などが立ちはだかる。また、年齢制限や外見を理由に不採用とされる差別的対応も見られる。さらに、プラットフォームで働き続けるには、資格取得、セミナー参加、顧客ネットワークの維持といった「見えない努力」が必須であり、さらに小規模プラットフォームへの登録や副業への投資も重なって金銭的・精神的リスクが常に伴う。詐欺的な求人に騙されるケースも少なくない。このように Doshi の研究によって、構造的なジェンダー格差と不安定性が制度として組み込まれていることが明らかにされている。

以上に検討してきたプラットフォームとギグワーカーに関する研究は主に欧米で行われてきた。家事労働に関する研究は日本でも海外でも蓄積されてきているものの、日本の学術界においてプラットフォームと家事労働の研究は接続されていない。そこで本研究では、日本の文脈について上記の議論、理論を応用し、また拡張することを目的とし、日本で女性たちに利用されているプラットフォームの分析を試みる。

3 調査方法

本調査では子どもを育てる女性向けのうち、比較的知名度の高い2つのプラットフォームを選択した。1つは1つは掃除・整理整頓など家事労働全般を対象とするプラットフォームA、もう1つは育児・家事代行に特化したプラットフォームBである。どちらもマッチング型である。両者は都市部において一定の利用者数と業界内での認知度を有しており、媒体としての機能だけでなく、家事労働の新たな表象装置としての役割を果たしている点に着目した。

調査対象は、各プラットフォームの公式ウェブサイトおよびSNSで一般に公開されている（会員でなくても見ることが可能な範囲）プロモーションコンテンツ、インタビュー、紹介動画、利用者の声、家事代行者（ギグワーカー）のプロフィール情報などである。これらのコンテンツをデータとして収集し、質的内容分析を行った。

分析にあたっては、以下の観点からコーディングを行った：（1）誰が（どのような属性の人物が）サービス提供者／利用者として描かれているか（2）ギグワーカーがどのように「便利さ」「安心」「プロフェッショナル性」として表象されているか（3）プラットフォームがどのような「理想的な家庭像」「母親像」を暗示しているか（4）どのような経済的な価値が家事労働に付与されているか。

このようなコーディングを通じて、プラットフォーム上でどのように女性の家事・ケア労働がどのように描かれているのかを考察した。次章では、具体的な分析結果を提示し、それらが示す社会的含意について論じる。

4 調査結果

4-1 2つの「プロフェッショナル」像

調査から、プラットフォームによって2つの異なるイメージが形成されていることが明らかになった。家事全般を扱うプラットフォームAは、これまで家庭という私的領域に埋もれていた主婦の経験知を、市場で通用する公的なスキルへと転換させることで、ギグワーカーの労働を価値づける。ウェブサイトに掲載される提供者のプロフィールには、長年の主婦経験で培った時短術、子育て経験を活かした栄養満点レシピといった、家庭生活に根差した経験を専門性としてアピールする記述が頻出する。これは、生活実践の中に蓄積された経験を専門性として再定義し、価値化する試みである。

そのために、プラットフォームAはいくつかの装置を用いている。まず、提供者に独自の呼称を用いて肩書きを与えることで、単なる「お手伝いさん」ではないプロフェッショナルとしてのアイデンティティを付与する。次に、提供者自身がスキルや経験、レビュー評価を基に時給を設定するマーケットメカニズムを導入する。これにより、家事労働に「1時間1500円から」といった明確な経済的価値が与えられ、スキルが高いワーカーはより高い報酬を得られるという、能力主義的な価値づけがなされる。

この戦略は、潜在的な主婦層をギグワーカーとして市場に動員する上で効果的であり、これまで無償とさ

れてきた労働に金銭的価値を与えている。しかし同時に、それは「家事は女性の経験が活きる領域」という、先行研究で指摘された根強いジェンダー分業の構造をなぞり、強化する側面を持つ。

他方、子どものケアという、より専門性が問われる領域を主軸とするプラットフォームBは、公的な「資格」をプロフェッショナル性を担保するものとして位置づけることで、労働の価値を担保する。ウェブサイトでは、提供者が「保育士」「幼稚園教諭」「看護師」といった国家資格を保有していることが繰り返し強調される。

プラットフォームBでは、この公的資格を基盤とした階層構造を持つ。資格保有者は非保有者よりも高い時給を設定でき、さらに語学や音楽といった付加的な専門スキルを持つ提供者は、より高い報酬を得ることが可能になる。この戦略は、利用者の知らない人に子どもを預けるという不安を払拭し、サービスの価格を正当化する上で極めて有効である。Atanasoski & Vola (2019)が指摘するような「価値の低い仕事」というよりも、保育を高度な専門労働として位置づけているともいえる。しかし、プラットフォームAと同様に、その担い手として描かれるのは圧倒的に女性であり、ケアは女性の専門領域というジェンダー規範を再生産している点では共通している。

4-2 利用者像と見えない構造的障壁

プラットフォームは、家事労働が「誰に」「どのように」取引されるべきかという理想のモデルを提示する。両プラットフォームが理想の利用者として描くのは、仕事と子育てを両立させようと奮闘する都市部の中流層以上の母親である。彼女たちは、プラットフォームを利用することで、単に家事育児の時間を節約するのではない。プラットフォームAの利用者は、家事労働から解放されることで子どもと向き合う質の高い時間やキャリアのための時間を手に入れる賢い女性として描かれる。

この利用者像の提示は、家事・育児代行サービスの利用に伴う罪悪感を払拭し、それを合理的でポジティブな選択として正当化する機能を持つ。そして、ギグワーカーの労働は、利用者の時間やキャリア継続の可能性といった、より高次の価値を生み出す源泉として取引される。これにより、プラットフォームは、藤田・額賀(2021)が指摘するような高学歴・高収入の母親がテクノロジーを導入して家事の効率化を図るのと同様のロジックを、人的サービスにおいて展開しているのである。

欧米の先行研究では、ワーカーと利用者の接触をなくし、労働を不可視化する傾向が指摘されたが、日本のプラットフォームでは異なる様相を呈する。プラットフォームAおよびBでは、レビューやプロフィールを通じてギグワーカーの人柄や個性を前面に押し出すことで安心を担保しており、労働そのものを隠蔽する方向にはない。ワーカー達は、スキルのみならず人柄といった人間性までを含めた多面的な評価の対象となり、その結果が商品情報のように公開・取引されている。

しかし、不可視化されているのは、Doshi (2024) が指摘したようなギグワーカーが直面する構造的な困難である。ウェブサイト上では、プラットフォームで働くことの「柔軟性」や「やりがい」といったポジティブな側面が強調される一方で、研修費などの初期投資、不安定な収入、アルゴリズムによる一方的な評価やアカウント停止のリスク、顧客獲得のための「見えない努力」といった、労働の不安定性やそれに伴う精神的・経済的負担についてはほぼ言及されない。プラットフォームは、ギグワーカーを自律した「個人事業主」として描くことで、雇用者としての責任を回避し、Dubal (2020) らが批判する自己責任型労働の構造を温存するともいえる。

4-3 考察

以上の分析結果から、第一に、プラットフォームは、「手作り規範」や「徹底育児」といった根強い文化的圧力に対する一つの戦略として自らを位置づけている。高性能家電の導入が一部の高所得層に限られる中(藤田・額賀 2021)、プラットフォームはより柔軟な価格帯で「プロの手」を提供することで、物理的な家事労働からの解放を可能にする。これにより、女性たちは削減された時間を、増加傾向にある育児時間やキャリアに充てることが可能になる、という物語を提示する。

第二に、プラットフォームは女性間の階層を前提とし、それを再生産する装置として機能している。高所得の女性が低所得の女性の労働力を買うことで自らのワークライフバランスを達成するという構図であり、女性全体の解放というよりは、特定の階層の女性の負担を別の階層の女性へと移転させるメカニズムとして働いている側面が強い。そして、先行研究で指摘された「労働の不可視化」はみられない一方で、日本ではワーカーの専門性や本物らしさを前面に押し出す一方で、Doshi (2024) が指摘した構造的問題は不可視化されているといえるだろう。

5 おわりに

日本の家事代行プラットフォームは、これまで家庭内に留まっていた家事労働を「プロの仕事」として市場に再定義し、その価値を可視化するという変化をもたらした。これにより、提供者はスキルを活かす新たな機会を得て、利用者は多様なライフスタイルを追求する選択肢を手に入れている。しかし、本研究のようなウェブサイトの言説分析から見えてくるのは、その一面に過ぎない。分析からは、ケアの担い手が女性中心であるジェンダー規範の再生産や、利用者と提供者間の階層差、ギグワーカーが直面する不安定性といった根深い課題も示唆される。本研究は、こうした点を明らかにするための初期的な試みである。今後、実際に働く人々や利用者の経験が、提示される理想像とどう異なり、どのような困難や葛藤を抱えているのかを深く理解するためには、今後、インタビュー調査など多角的なデータに基づくさらなる研究が不可欠である。こうした課題認識と研究の限界を踏まえ、プラットフォームをより公正な社会インフラへと発展させるためには、政策による働き手の保護、事業者による透明性の向上、そして社会全体でケアの担い手の多様性を支える文化の醸成が求められる。

【参考文献】

- Aagaard, L. K., & Madsen, L. V. (2022). Technological fascination and reluctance: Gendered practices in the smart home. *Buildings and Cities*, 3(1), 677–691.
- Doshi, R. (2025). Navigating the algorithmic maze: How women access beauty platform work in Mumbai. The 75th Annual Conference of the International Communication Association.
- Dubal, V. B. (2020). The time politics of home-based digital piecework. *Perspectives on Ethics: Symposium Issue “The Future of Work in the Age of Automation and AI”*, Center for Ethics, University of San Francisco, 50.
- 江原由美子(1988)「料理番組から見る『主婦』の戦後史」飯田深雪・江原由美子・土井勝・長山節子編『NHK「きょうの料理」きのう・あす』有斐閣, 143-178 頁.
- Fleming, P. (2017). The human capital hoax: Work, debt and insecurity in the era of Uberization. *Organization Studies*, 38(5), 691–709.
- 藤田結子・額賀美紗子(2021)「家庭における食事の用意をめぐる意味づけ」『社会学評論』, 72(2), 151-168 頁.
- 福田亮子(2009)「高齢者にとってのハイテク家電の問題点—炊飯器利用時の行動・眼球運動・生体信号の分析に基づく考察」『Keio SFC Journal』, 9(2).
- Hays, S. (1996). *The cultural contradictions of motherhood*. Yale University Press.
- Kellogg, K. C., Valentine, M. A., & Christin, A. (2020). Algorithms at work: The new contested terrain of control. *Academy of Management Annals*, 14(1), 366–410.
- Martin, R. (2022). Energy housekeeping: Intersections of gender, domestic labour and technologies. *Buildings and Cities*, 3(1), 554–569.
- Moon, B. J., Kwak, S. S., Kang, D., Lee, H., & Choi, J. (2020, August). The effects of Internet of Robotic Things on in-home social family relationships. Conference paper or report.
- Shestakofsky, B. (2017). Working algorithms: Software automation and the future of work. *Work and Occupations*, 44(4), 376–423.
- Shiomi, M., & Hagita, N. (2017). Social acceptance toward a childcare support robot system: Web-based cultural differences investigation and a field study in Japan. *Advanced Robotics*, 31(14), 727–738.
- Strengers, Y., & Nicholls, L. (2017). Aesthetic pleasures and gendered tech-work in the 21st-century smart home. *Media International Australia*, 166(1), 70–80.
- Takahara, M., Goshō, K., Huang, F., Tanev, I., & Shimohara, K. (2020). Home care system for supporting caregivers and elderly care receivers. In *Lecture Notes in Computer Science* (pp. 529–538). Springer International Publishing.

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
「食をめぐる階層とジェンダーの交差—— インテンシブ・フィーディングと手作り規 範の比較から」	『家族社会学研究』36 卷 2 号 p. 181-190	2024 年 11 月
“AI and Women’s Domestic Labor”(研究報 告)	AI and Information Integrity: Uses and Misuses Dialogue Series UTokyo–Cambridge Voices 東京大学本郷キャンパス	2025 年 3 月